＜前回＞：後期オリエンテーション

後期：自然神学の新しい可能性

１．言語・解釈学から聖書へ

１－１：リクール　１－２：マクフェイグ　１－３：リューサー

２．聖書学の諸動向

２－１：イエス研究とクロッサン　12/3, 10　２－２：パウロ研究から　12/17

３．聖書学から政治思想へ

３－１：聖書と政治思想　1/7　３－２：アガンベン　1/14　３－３：ジジェク　1/21

Exkurs

・アガペーとエロス　・脳科学からキリスト教思想へ　11/19, 26

＜前提＞マクフェイグ

Ａ．メタファー論

（０）聖書からの具体例（ヨハネ 6:22 ～ 59）

２.「イエス＝命のパン」: 字義通りの意味で理解すると、「人々」と同じ疑問を生じざるを得ない　→　解釈の葛藤による意味の生成

（１）言語の諸レベルにおける隠喩の位置

（２）旧修辞学から新しい隠喩論へ

１）伝統的隠喩論とその問題性

５．古い隠喩論

６．新しい隠喩論は、隠喩を言葉のレベルにおける意味の逸脱としてではなく、文のレベルにおいて可能になる隠喩表現をめぐる複数の解釈の葛藤（相互作用）から可能になる新しい意味論的な革新の問題として捉える試みである。とくに、隠喩との関わりで伝統的に持ち出されるいわゆる「字義的意味」（literal meaning）という考えは、本質的な問題を含んでいる。

２）新しい隠喩論の試み

７．レイコフ：「隠喩は詩人だけでのものではない。それは日常言語に内在し、生、死、時といった抽象概念を把握するための主要な方法なのである」（レイコフ、1994、62）。とくに科学言語における隠喩論が示すように、隠喩は科学における発見の論理に属している。

「源泉領域から目標領域への写像」（「人生＝旅」「神＝父」「時間＝お金」）

８．隠喩は、優れて現実の認知・認識（思想と経験の方法・あり方）に関わる問題であり、人間の日常的現実性の中心に位置するのである。

９．リクール：隠喩はそれを使用することによって目標領域のそれまで十分に認知されていなかった構造が顕わにするという機能を有するのであり、それは隠喩の発見的機能に関わる問題である。

10.「私は命のパンである」: イエスについてのヨセフの息子（肉体と持った人間）とパンという意味の多義性ではなく、イエスをについての二つの解釈・見方の衝突による意味のよじれと、それによって引き起こされる永遠の命をめぐるイエスの出来事についての新しい意味の生成である。こうして、パンとイエスの間に写像が構成され、イエスについての一連の認知が可能になるのである。

（３）隠喩の指示の二重性と実在の開示

Ｂ．フェミニスト神学の基礎論としてのモデル理論

（１）「神のモデル」とは何か？

３．Ricoeur, *Biblical interpretation*（85）

model: scientific language,　heuristic device/ instrument of re-description

three sorts of models:

scale models（materially resemble, model boat）/　analogical models（structual identities,

diagram）/ theoretical models

５．Sallie McFague, *Models of God. Theology for an Ecological, Nuclear Age*, Fortress, 1987.

The essence of metaphorical theology is precisely the refusal to identify human constructions with divine reality. …… To say that God is mother is not to identify God with mother, but to understand God in light of some of the characteristics associated with mothering. …… God is/is not mother, or yet again God as mother. ……（22）

（２）モデルの複数性と相補性

８．モデルの特性として

①モデルの複数性（まず現象学的に確認・記述され、次に理論的に＜存在論的に＞相互に位置づけられ関連づけられる）

②モデルの複数性→神経験の複数性

モデル・レベルの非排他性・相補性（多様性の承認）と概念レベルの排他性

cf: 人格と非人格（ヒック）

③キリスト教の伝統的な「神のモデル」の複数性と基本的性格（男性モデル）

10．McFague:

The dominance of the patriarchal model excluded the emergence of other models to express the relationship between God and the world.

we must ask whether the Judeo-Christian tradition's triumphalist imaginary for the relationship between God and the world is helpful or harmful. （ix）

metaphorical theology is pluralistic, welcoming many models of God.

no metaphors or models can be reified, petrified, or expanded so as to exclude all others.

hypothetical, tentative,partial,open ended, skeptical, and heuristic tolerant of pluralistic（39）

The goal of my work will be to investigate the potential of the maternal model but to do so in a fashion that will provide an alternative interpretive context for the paternal model -- a parental one. （100）

cf: Rosemary Radford Ruether, *Sexism and God-Talk. Toward a Feminist Theology*, Boston, 1983.

（３）「神のモデル」の選択・適切性の基準

12．ティリッヒの「相関の方法」:

「状況－メッセージ」「問い－答え」（コミュニケーション・フィールド）

現在と過去・伝統の両極

↓

状況適合性と自己同一性という二つの課題：

①その時代の宗教的問いに適合したものであること

②また同時にキリスト教の伝統との連続性を満たし得るものであること

↓

モデルの適切性の基準：

現代の歴史的思想的状況にふさわしいキリスト教的モデルとは何か。

（４）：現代神学の状況と「神のモデル」の選択

13．McFague

The question we must ask is not whether one is true and the other false, but which one is a better portrait of Christian faith for our day.（xiii）

The Monarchical Model: God as Lord and King of the Universe/Omnipotence/Sovereignty

This imaginative picture is prevalent in mainstream Christianity（63）

metaphor or model: not description, as-if fashion about the God-world relationship,

Since both metaphors are inadequate, we have to ask which one is better in our time, and to qualify it with other metaphors and models. （70）

14．＜状況＞ → 現代の要求する新しい感受性（the new sensibility） （16）

A Holistic View of Reality/Responsibility for nuclear knowledge/
consciousness of the constructive character of all human activities）

15. ＜聖書・伝統との連続性＞
キリスト教神学の源泉：「イエスの物語」（the story of Jesus）

（５）解釈から倫理へ

19. Ricoeur (d)、想像力・構想力（出来事）から倫理へ。宗教哲学の可能性。

20. McFague

To say that God is present in the world as mother, lover, and friend of the last and least in all creation is to characterize the Christian gospel as radical, surprising love.

these metaphors be allowed to try their chance at representing for our time the creating, saving, and sustaining activities of God in relation to the world and that, together, the three metaphors of God as parent, lover, and friend form a "trinity" expressing God's impartial, reuniting, and reciprocal love to the world.

God as parent is on the side of life as such. Life is not something alien to God but as god's bidy（which is not identical with God） is expressive of their parents.（91）

All three loves --- creative,salivic, and sustaining --- are united in that each points to a desire for union .... Creative love（or agape） is the love of God for being as such; it is the affirmation of all creatures by the parent who bodies forth all that is. Salvic love（or eros）is the passionate manifestation --- the "incarnation" --- of divine love for us, the beloved;

The metaphor .. but with two qualifications. First, as a metaphor, the relationship of divine agency and the world as God's body, to human agency and the human body, is one of analogy, not correspondence --- that is, it both fits and does not fit.

it is obviously ridiculous to think of the world ... as the same kind of body as ours or in the same relationship to its agent.

we must risk its nonsense as well.

Second, if our model does tend toward the claim that in loving the world, God loves what belongs to God, is this not a desirable and indeed necessary direction for a vision of the Christian faith as inclusive of all beings? Would it be more appropriate to speak of God as loving what is alien or belongs to another reality?

the awareness that "we are not our own," that we owe our existence to the life that came before us, and must pass life along to those who will come after. Awareness of the intricate, interdependent network of life, with God at its center as well as at every periphery, needs to become part of our daily, functioning sensibility: the model of God as the parent, lover, and friend of the world as God's body is a promising candidate to give imaginative reality to that sensibility.（94-95）

４． 言語・解釈学から聖書へ

１―３：リューサー

A．フェミニスト神学の誕生

１．1960 年代以前のフェミニズムが主として男性中心の社会システムにおける女性の権利獲得を目指していたのに対して、この３０年間のフェミニズムは社会システム全般に対する異議の申し立てを超えて､それを支え正当化している価値観や世界像の批判へと進み、文化や意識のレベルでの変革を追求するに至っている（大越, 1997）。

①キリスト教が直接的あるいは間接的に女性に対する不当な暴力に荷担し、それを正当化してきた点について｡例えば、魔女裁判の場合。

②キリスト教が男性優位の価値観を制度化し、構造的に女性の権利を抑圧してきた点について｡女性の聖職者への叙階に関する制限など｡但しこの制度化は意識的になされている場合だけでなく、無意識あるいは自動的に行われているものに注目する必要が

ある。
③男性中心の価値観の枠内における理想の女性像を女性に押しつけてきた点について。自己犠牲的愛、謙虚さ、従順さなどを女性の美徳として奨励し ── イエスの十字架はこうした理想的女性の規範として使用される ── 、大胆に自己を主張し権利を求める女性を自己矛盾に陥らせる（つまり、自己規制を要求する）、あるいはこうした女性に対する他の女性の反発や攻撃を助長する。
④女性は自らの宗教経験を表現するにも男性中心の言語を用いざるを得ない。女性は自らの言語すら奪われている。

２．キリスト教における女性思想の系譜＋フェミニズムの問題提起
→　フェミニスト神学

フェミニズムの問題意識を共有しつつ、新しいキリスト教の形成を目指す神学運動として展開されている。そこには、キリスト教の徹底的な否定論から伝統の再生論まで多様な議論が交錯している。

３．争点としての聖書解釈の問題（フェミニスト的聖書解釈）

「この探求の出発点は、共観福音書のイエスとの出会い、つまり彼について蓄積された教義ではなく、彼のメッセージと実践でなければならない。」（Ruether, 1983,p.135）

日本におけるフェミニスト神学も、この聖書解釈という場を中心に展開してきた。

絹川久子『聖書のフェミニズム　女性の自立をめざして』ヨルダン社、『ジェンダーの視点で読む聖書』日本キリスト教団出版局。

フィリス・トリブル『フェミニスト視点による聖書読解入門』新教出版社。

４．対照的で代表的な論者として次の二人に注目

デイリ（Mary Daly, 1928-2010）とリューサー（Rosemary Radford Ruether ,1936-）

アメリカ、白人、リベラルなキリスト教という文脈、そしてこの文脈を超えた展開。

B．デイリとリューサー

５．神が男性イメージ（家父長的で王権的）によってのみ語られている点に関して。

デイリ（Daly, 1973）は、イエスは男性であり、それゆえ女性の生き方の規範になり得ないと主張する ── イエスは過去の人物であり、現代人の規範にはなり得ない、そもそも人間は自分自身の人生を生きねばならないのであって、他人を規範とすることはできない ──。

７．真の人間、規範的人間としてのイエスの否定であり、イエスの神性の否定をさらに超えた徹底的なキリスト教批判＝最大の争点。

「イエスの十字架に集約された神の謙卑（ケノーシス）＝人間の、とりわけ女性の美徳としての自己否定、自己犠牲の模範」。これによって、女性の抑圧メカニズムを強化し、女性が自らの置かれた抑圧状況を不当なものとして意識化することをも困難にする。

十字架は父権的宗教が女神を殺害し女性に対する暴力を内面化するところに成立した象徴であって、そこにつるされたのは実はイエスではなく、女神だった。

８．リューサー：デイリの伝統的キリスト論の徹底的な否定論に対して、フェミニスト神学に至る思想系譜をキリスト教思想の伝統自体の中に再発見し、その過程でキリスト論の再構築を試みている。

９．リューサー（Ruether,1983,116-138）。古典的キリスト論（カルケドン公会議の）は、贖われたメシア的王の思想と神と人間を結びつける神的知恵の思想とを基盤に成立したが、その際に男性象徴（男性としてのイエス）が選ばれた。

↓

イエスという歴史的人物が男性であったことと、神の子あるいはロゴスが男性であることとの間に必然的かつ存在論的な関係があるという考えが派生

↓

女性原理が神象徴の中から排除される。

10. イエスの宗教運動から家父長的なキリスト論（正統キリスト論）の成立という 400 年以上のわたる歴史的なプロセス（キリスト論の家父長化）は、イエスの宗教運動からの変質であり、それは、他のキリスト論の諸様態の排除によって可能となった。
11. イエスの宗教運動に内包されたフェミニスト的キリスト論（女性の経験と相関しうるキリスト論）。リューサーのフェミニスト神学の基礎論の一つは聖書学的知見。
　フェミニスト神学の聖書解釈は、まずイエスの宗教運動の中に男性優位イデオロギーとは異質な主張を再発見し、続いて正統キリスト論によって抑圧されてはいるが様々な仕方で生き続けてきた他のキリスト論を掘り起こす作業を行う。
↓
　イエスの宣教した神の国は国家主義的でも彼岸的でもない。神の国は支配と被支配、抑圧と服従の構造を乗り越えるものとしてこの地上に到来する。イエスはメシア的預言者を王的にではなく、僕として象徴化する。イエスは当時のユダヤ社会において制度化されていた様々な差別抑圧構造と戦わざるを得なかった。
12. 正典化のプロセス
多様な可能性の中より家父長的なキリスト論が正統キリスト論として公認され、それに伴って他のキリスト論の可能性は聖書テキストから排除され隠蔽される。
13. リューサーが注目するのは、神秘主義の伝統に見出される両性具有的キリスト論と、預言者的千年王国論的運動に見られる霊的キリスト論。
　キリスト教思想史研究者としてリューサー。
・イエスに女性的あるいは母的な属性を与える両性具有的キリスト論。その背後には、両性具有人の神話が潜んでおり、グノーシス主義のキリスト論から中世の女性神秘主義者（ノーリジのジューリアンなど）のキリスト理解を経て、近代のベーメやスヴェーデンボルグの神秘主義、そしてロマン主義に影響。
・モンタノス運動から中世のフィオーレのヨアキムの影響を受けた諸セクト（14 世紀のペギン会系のセクトなど）や 18 世紀のシェーカーの運動に至る預言者的運動においては、霊的キリスト論が展開されてきた。
「この種の霊的キリスト論は、過去の全くの歴史的なキリストと今も臨在する霊を区別しない。むしろキリストを、今現在、人間 ── 男も女も ── の中に顕わにされ続ける力とみなす」（ibid.,131）。
↓
14. 「支配－従属」のモデルに規定されないキリスト論（フェミニスト的キリスト論）の再構築。
「解放者として語るイエスの能力は、男であることに存するのではなく、この支配の制度を批判し、彼自身の人格の中に、奉仕と互いの法的権限を認め合う新しい人間性を具現しようとした、その事実に存するのである。……神学的に言って、イエスが男であることは、究極的な重要さを持たないと言えるかもしれない。それは、家父長的特権を認める枠組みの中で、社会的象徴的意味を持つだけである。この意味で、解放された人間の代表であり、解放を促す神の言葉であるキリストとしてのイエスは、家父長制のケノーシスと新しい人間性の宣言を顕わにする。この新しい人間性は、ヒエラルキーに基づく社会的地位の特権を捨て、低き者のために語る生き方を通して宣言されるのである。」（ibid.,137）
15. デイリ：男性と女性の非和解的な敵対関係を前提とした「女性解放論」
　リューサー：「女と男からなる新しい人間性」の実現という意味における「人間解放の神学」

Ｃ．リューサーのエコ・フェミニスト神学

Rosemary Radford Ruether, "Ecofeminism: The Challenge to Theology," in: Dieter T. Hessel and Rosemary Radford Ruether（eds.）, *Christianity and Ecology. Seeking the Well-Being of Earth and Humans*, Harvard University Press, 2000. pp. 97-112.

リューサー「エコフェミニズム――神学への挑戦」
１．問題提起：挑戦（97-98）
エコフェミニズムは、古典的なキリスト教神学と、家父長的な世界観によって形成されたすべての古典的宗教とに対する徹底した挑戦であるが、この論文では、古代の中近東とギリシャ―ローマ世界の世界観に根差したキリスト教に焦点が絞られる。
エコフェミニズムは女性への支配と自然への支配の相互連関を吟味し、それから解放を目指しているが、性差別と環境的搾取の間に見られるこの関係性には、文化―象徴的レベルと社会経済的レベルの二つのレベルが存在している。前者は後者を反映し承認するイデオロギー的な上部構造と考えられる。つまり、後者は、事物の自然本性あるいは神（神々）の意志との関連で正当化される。女性、奴隷、動物、土地への男性の支配関係は財産・所有として法的に指定され、この法は神（神々）よって与えられるという連関である。
（二つのレベルの関係の議論はやや形式的。実質的な分析・議論が必要である。）
２．支配関係の歴史的考察――神話からアウグスティヌス、近代まで(98-106)
1)古代バビロニアの世界創世神話、母の支配する古い世界と都市国家の新しい世界秩序
ティアマトとマルドゥク
母＝物質
・プラトンとヘブライ語聖書の創造神話
脱身体化した男性的行為者、世界霊魂→個別的霊魂
身体から発する激情をコントロールし知性を育む
・キリスト教は霊魂の先在性や輪廻という考えを捨て去ったが、プラトンの宇宙論の諸前提を受け継いだ。『ティマイオス』を通してヘブライ語聖書の創造物語を読む。
魂：身体から分離可能な存在論的な実体
教父たちは、魂（洗礼を通してキリストへと贖われる得る）をジェンダー中立的なものと考えたが、女性的なものとしての女(women as female、罪への傾向性に近い)からは区別された。女は男性的な理性の支配に従属する。
2)原初の平等とその喪失
・ヘブライ的物語
神の像におけるすべての人間の平等という見方の基礎となり得るであったが、後のキリスト教はこの方向性を取らなかった。
創世記の２～３章は、最近のフェミニスト的な弁護にもかかわらず、男性が規範的な人間であり、女性は派生的。
（これは、リューサーの読み方であり、リューサーも指摘するように、別のフェミニスト的な読み方も可能）
・ヘブライ的希望：元来は、パラダイスが回復される未来の時、地上的であり、可死性に拘束されている。
↓
ペルシャ的終末論（ゾロアスター教）の影響、黙示的終末論。
・初期のキリスト教的運動の中には、あらゆる支配的関係からのキリスト教における解放を示唆するものが見られる。パウロのガラテヤの信徒への手紙 3：28。原初の平等性。
しかし、家父長的な家族と政治秩序への制度化において、この徹底的な平等性は急速に抑圧されることになった。パウロ以降の動向。
（原初の平等性とその喪失という議論は、リューサーのフェミニスト神学にとって決定的な重要性を有する。キリスト教は本来性差別を超えた平等性を有していたからこそ、歴史の長期にわたる歪曲にもかかわらず、その本来性を回復する仕方での伝統の再解釈・再構築が可能である、との議論。）
・アウグスティヌスの女性従属論
女性的なものは劣った身体的な本性。女性が神の像において存在するのは、男性的なものと結びつくことによってのみ可能。エバの反逆。そこには、脆弱性からの逃亡の投影が見

られる。
・ヘブライ的思惟とギリシャ的思惟を融合させた家父長的なパターンが､宗教改革を経て、近代にいたるまで、キリスト教の宇宙論、人間学、キリスト論、救済論を支配していた。
3)フェミニスト神学への流れ
・16、17 世紀の先駆者たち、クエーカー
　支配は、支配的男性の罪により生じた。キリストは支配を克服するために来たが、男性の教会指導者は福音を性差別に歪曲した。
・19 世紀、モット、グリムケ
　原初の回復された平等の人間学は､近代のフェミニスト神学によって再発見されたが､19 世紀のフェミニストは人間中心主義的世界観を問題にしなかった。フェミニスト神学をエコフェミニズムによって深めることによってのみ、家父長的な宇宙論に疑問を呈し、キリスト教的物語の全構造に立ち向かうことの必要性が認識できるようになる。
３．エコフェミニスト的なキリスト教伝統の再構築にむけて(106-110)
　エコロジカルな意識として生じた徹底化の文脈にフェミニスト神学を組み込むことは、現在進行中である。いくつかの問題を取り上げる。
1)自己論（人間理解）
・プラトニズム的な心身二元論への挑戦
人間は長い進化プロセスの子孫であり、多様な有機体の諸レベルにおける物質―エネルギーの動態の連続性（無機的エネルギーから生命、生命の自覚、有機体における反省的な自己意識へ）に基づいている。
ホモサピエンスの出現と支配・搾取。スチュワードシップは、最初の命令ではなく、支配的男性の事後的な努力（乱用を正だし、よりよい支配者となる)。反省的自己意識とは分離可能な存在論的実体ではなく、脳―身体に不可欠でそれとともに死ぬ我々の内面性の経験である。不死性は、個的意識の保持にあるのではなく、終わることなく循環する物質―エネルギーの奇蹟・神秘にある。
　エコロジカルな自己意識
　宇宙プロセスの全体を祝福し、我々の生命を地球共同体全体の生命と調和させることが必要である。これは、相互限定と交互的な生付与的はぐくみの霊性と倫理を要求する。
2)悪と救済
悪の存在しない原初のパラダイスと、悪と死が克服される未来のパラダイスという前提を放棄すること。
　ブラジルのエコフェミニスト、イボンヌ・ゲバラを参照しつつ、議論がなされる。
（Ivone Gebara については、次を参照。
　http://a-grande-guerra.blogspot.com/2010/07/feminista-e-teologa-ivone-gebara-ataque.html
　http://www.clas.ufl.edu/users/bron/PDF--Christianity/Lorentzen--Ivone%20Gebara.pdf　）
・悪は常に我々と共にある。
罪は、可死性、有限性、脆弱性から逃避しようとする努力のうちにある。逃避の欲望は、他の人間や土地や動物を独占しようとする力ある男によって有害な形が与えられる。
非脆弱さ確保しようとする努力が他者や地球を犠牲にして力を蓄えようする際限のないプロセスを強いる。ターゲットしての女性。
　女性・身体・地球の支配とそれからの逃亡＝自らの否定された有限性の克服とそれからの逃亡
　これが、歪曲のシステムを生み出す。支配と歪みのシステムが罪である。
　　↓
　救済とは、歪みのシステムを廃棄することにであって、そうすることによって、相互に命を与え合う共同性を期待できるようになる。
　誤った逃亡主義から解放された終末的希望のヴィジョン
様々な悲劇の只中で豊かな喜びを共に享受すること、限界や過ちや事故をも等しく分かち

合うこと。
罪（他者を犠牲にすること）とハン（Han、犠牲にされた者の痛み）に根差した逃亡主義的自己と救済史を破棄すること。
・神論：
　神を男性的な支配階級の意識によってモデル化するのではなく、生命の内在的な源泉の生命の再生として描くこと。神は泉であり、母体である。
　内在的な合理性を養う母体として三位一体（生命自体の基礎的な力動性の象徴的表現）を理解する。
種の多様性を祝福しそれらの相互関係を肯定する。多様性と相互作用における統一性。
三位一体的神とは、宇宙的、惑星的、社会的そして人格的な生命をはぐくみ贖う神であり、その名はソフィア、聖なる知恵である。
・キリスト論：
英雄的戦士というメシア神話の問題性。復讐の乾きと結びつく。破壊の循環を再生産し、新しい犠牲を生み出す。
　イエスは、それとは異なった預言者的人物であり、破壊の循環を突破しようとする。
　メシア神話を転換しなければならない。平等な者の共同体の再発見への反メシア的な呼び出し。キリストとしてのイエスは、聖なる知恵を具現している。
・啓示：自然と歴史から。
　自然の内における啓示。自然という書物に照らして、歴史的聖書を読むこと。
↓
　自然の両義性：自然は破壊的で悲劇的な顔を持っている。
↓
単なる感傷主義は通用しない。ペリカンの二つの卵（マクダニエル）の残酷さ。
（ここから、大震災のことを考えるとどうなるか。個体の生存と種の存続の対立状況という難問）
↓
持続可能性と正義（貧しい者への優先的配慮）という二つの命令に直面して。
二つの倫理の緊張関係において、両者の正しいバランスを取ることが必要である。
　（これは、エコロジーにおけるソーシャルとディープとの関連性にも関わる。）

＜参考文献＞

１．大越愛子『フェミニズム入門』ちくま新書、『女性と宗教』岩波書店。
２．日本フェミニスト神学・宣教センター：
http://cftmj.cocolog-nifty.com/blog/cat2537789/index.html
３．Susan Frank Parsons（ed.）, *The Cambridge Companion to Feminist Theology*, Cambridge University Press, 2002.
４．Mary Daly, The Church and the Second Sex, Beacon Press, 1968（1985）.
（『教会と第二の性』未来社）
In *Beyond God the Father. Toward a Philosophy of Woman's Liberation,* Beacon Press, 1973.
５．Rosemary Radford Ruether, *Sexism and God-Talk. Toward a Feminist Theology,* SCM Press,1983.（リューサー『性差別と神の語りかけ　フェミニスト神学の試み』新教出版社。）
,『人間解放の神学』新教出版社。
,『マリア　教会における女性像』新教出版社、1983 年。
, *Gaia and God. Ecofeminist Theology of Earth Healing*, HarperOne,1992.
６．芦名定道「現代思想とキリスト論」、水垣渉・小高毅編『キリスト教論論争史』日本基督教団出版局、2003 年、529-567 頁。
７．熊澤義宣・野呂芳男 編『総説　現代神学』日本基督教団出版局。